

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	國學の栞（承前）：雜録
Author(s)	黒本，植
Citation	龍南會雜誌， 2 8： 2 3 - 3 5
Issue date	1894-06-27
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4412
Right	

之を學んには他の元素に關する知識を要し、又有機物の多くは炭素及水素或は炭素水素及酸素より成り、其相互の間の關係は他の化合物に對するよりも密接あるを以て、之を分て有機化學とし、他の元素の化合物等を學びたる後、之を學ぶを通常の順序とす。故に有機化學は又炭素化合物の化學とも稱す。然れども便宜上又必要上、炭素及炭素の或簡單ある化合物は之を無機化學上に於て論ずるあり。

國 學 の 葉

(承 前)

助 教 授

黒 本

植

古典學

令義解^{レツギダ}十卷 清原夏野等の撰、いはゆる養老令の注、

令集解^{シツカイ}三十七卷 惟宗直本の著、寫本にて傳はる、令を考ふるには、あの書、むかし、古書の後世に傳らざる者は、この書の引証に多く存れり、

延喜式五十卷 藤原時平等の勅を奉えての撰

類聚三代格三十二卷、殘缺 この中、弘仁格は、大納言藤原冬嗣等の撰、貞觀格は、大納言藤原氏宗等の撰、延喜格は、左大臣藤原時平等の撰、何れも勅を奉してあり、享祿本とて、十五卷あり、明治十七年の比、板行せり、舊金澤藩前田侯の秘庫に藏せる者を上梓せしあり、これをよしとす、坊間に傳はる尾張本より、多きこと六卷、

政事要略 惟宗允亮の著にて、本とは百三十卷ありし書なるよしあれど、今寫本にて傳はる所は、僅に九卷といふ、舊熊本藩の時習館にありし書は、十六卷あり、

法曹至要抄三卷 坂上兼明の著、鎌倉比の令律を見るに便なり、

貞永式目一卷 北條執權時代の式條あり、式條といふべきを、式目といひしは、公家を憚かりしあり

とそ、すへて北條家臣六人の撰あり、その比の政令を見るによし、こゝには、清三位入道宗光の諺解
あり、

職原抄二卷 北畠親房卿の作、これには、近藤芳樹の校本あり、これにつきて考ふべし、

職官志五卷 蒲生伊三郎秀實の著なり、令律格式を參照して、編述したる者あれば、制度の沿革をみ
るに尤便なり、

制度通 これは、支那の制度を旨とかきたる書なれど、本邦の制度をも聊記せば、參看によし、

柳營秘鑑十卷 徳川の儀式を記し、者あり、

殿居囊 忍屋隱士の撰にて、是も徳川の格式を記し、あり、

令玉掌中抄一卷 中原章任の撰にて、律の末書あり、大寶律も、養老律も、皆亡ひて、この末書のみ傳
れり、

裁判至要抄一卷 坂上明基の撰、裁判の事、三十二條を擧げたり、

以上は公武の令律を考ふるに、供すべき者、

西宮記二十五卷 西宮左大臣高明公の記録あり、禁中恒例臨時の儀式を記せり、寫本にて傳はる、

台記二十卷 宇治關白賴長公の記録あり、賴長公生年廿三歳、近衛院の康治元年壬戌正月より、三十

六歳、久壽二年四月まで、十四年間の事を記せり、賴長公の學問に博かりしことも、明に見ゆ、され
ども、今傳はれる本は、欠本にて、その全をみるゝことあたはず、外に別記といふが、八卷あり、この方
に、儀式の委しきことは、見えたり、

玉海二十八卷 月輪攝政兼實公の記録書なり、是も本とは、五十卷ありし者の由あれど、今僅に二十

八卷、寫本にて傳はれる、

園大曆三十三卷 中園太政大臣公賢公の記録なり、故にかく名つけたり、南朝の比の記録あり、

康富記二十卷 權大外記中原康富の記録あり、足利の比の記録なり、

百鍊抄十七卷 著者未詳かあらざれども、崇徳院の大治より記し起して、後深草院の正元の比までの事を記せり、

北山抄十一卷 大納言公任卿の作にて、一條院以來の儀式を記せり、寫本にて傳はる、

江家次第二十一卷 大江匡房の作

禁秘鈔三卷 順徳天皇の御作

弘安禮節一卷 これは、弘安とあれど、誤りて、もとは龜山上皇の洞中にて定め給ひし書なりとの説あり、

拾介抄六卷 左大臣實熙公の作、實熙公は、足利義政公同時の人にて、博學の人ありき、

公事根元一卷 一條禪閣兼良公の將軍家の請に應して作られ玄由いへり、松下見林の集釋あり、これに就きて看るへし、

以上は、皆有職家の日記抄物にて、亦是令典を考ふるに供すべき者、この外、禮儀類典とあり、

雲圖抄二卷 藤原朝隆の撰、寫本にて傳はる、

雅亮裝束抄三卷 是も寫本

飾抄三卷 土御門大納言通方卿の作、是も寫本

桃華藥葉一卷 一條禪閣兼良公の撰、是も

四季草七卷 伊勢貞丈の作

以上は、宮殿器物調度などの故實をえるに便なる者、

政談八卷 物徂徠の著

太平策三卷 同上

經濟錄十卷 太宰春臺の作

經濟問答秘錄三十一卷 肥前の儒者某の署名を忘れたり、

地方落穂集 卷數著者、皆忘れたる、

地方大概集 是も

以上は、皆經濟書にて、徳川時代の制度を考ふるに便ある者、

度量考二卷 物徂徠の著

三器彙考三卷 著者の名を忘れたり

度量衡説二卷 最上徳内の著

金銀圖録七卷 近藤守重の著

以上は、度量衡の沿革、及び金銀の圖説に之て、何れも熟讀せねくべき者、

國語學

和字正濫抄五卷 僧契沖の作よて、假字遣書の祖なり、

古言梯一卷 揖取魚彦の作にて、一言より十四言までの詞をあげ、古書をひきて、悉く正せり、

字音假名づかひ一卷 本居宣長の著にて、漢字の音づかひを知るによし、

漢字三音考一卷 同上漢、吳、唐の三音を論して、皇國の音の正しきを弁じたり、

古言清濁考三卷 石塚龍齋の作、

心の種二卷 萩原廣道の編にて、是は詠歌の爲めに編みし者なれども、本居大人の文法書を摘録し、

或は歌文の詞の異なる所を弁するなど、簡にして該、歌をよむにも、文をかくにも、極めて便ある書なり、

てにをば紐鏡一卷 本居宣長の著

かざし抄三卷 富士谷成章の著

あゆみ抄六卷 同上

ふりわけ髪一卷 小澤芦菴の著

枕詞燭明抄三卷 下河邊長流の著

冠辭考十卷 賀茂眞淵の著

詞葉新雅一卷 富士谷成胤の著、この書は、伊呂波順にして、俗言もて雅語をしるやうに編めり、初學には極めて便あり、

詞の捷徑五卷 鈴木重胤の著

歌學

万葉集略解三十卷 橘千蔭の著、万葉をよむはこれにしくはなかるべし、

万葉新採百首解三卷 賀茂眞淵の選、万葉の中より尤勝れたるを、百首えり出で、注したるあり、先よれを玩味して、その大要を悟るべし、

古今集二十卷 歌を學ふには、先この集をひたすら朗吟すべし、さらでは、歌をよむとも、邪路に入るべし、註釋には、遠鏡がよし、

美濃家包五卷 本居宣長の新古今集の歌どもを論難したるなり、歌學に益あり、尾張家包といふ書もあり、これも益あり、

無名抄二卷 鳴長明の作にて、その時代の雜談をあけて、歌道を論じたる、面白し、文章も、ことにめでたし、

金槐和歌集三卷 鎌倉右大臣實朝公の家集にて、古、万葉、古今の餘響を傳へて、歌の姿を、しく、大丈夫の歌あり、

新葉和歌集二十卷 後醍醐天皇の皇子、中務卿宗良親王の撰にて、その比の君臣の歌を集められしより、勅撰に擬ふべき由の論旨を載せたり、よりて後世これを代々の勅撰集に合せて、二十二代集とす、虛作少なければ、史學にも補あり、近比、村上忠順の頭註したるを一巻にして、發行せり、

夫木和歌抄三十六卷 藤原長清の撰にて、代々の勅撰にもれたる歌どもを、輯めたるなり、これに援

書と題して、二本にしたるあり、是にてもよし、物名などの証とある歌、多かり、

草庵和歌集玉筥九卷 本居宣長の頼阿法師か歌集を宣阿法師の解きたる、この誤どもを悉く掃きたるしあり、歌學には、是も大よ益あるを覺ゆ、

春葉集二卷 荷田東滿の集あり

縣居歌集一卷 賀茂眞淵の集なり、この二家の集は、皆丈夫の歌にして、婦女子の歌にあらず、玩味すべし、

桂園一枝三卷 香川景樹の集あり、詠歌絶唱あれども、歌道にいりたる後に學ぶべし、さうでは、その歌纖巧に流れて、必僻路に走る、

峰の眞さかき一卷 龍草廬の集あり、儒者の歌あれど、中々よき歌あり、

歌袋六卷 富士谷成壽の著、歌を學ぶには、坐右に常にくべき書なり、

明倫歌集十卷 徳川齊昭卿の御撰、倫理に關する歌どもを輯められたり、朝夕諷誦すへし、近比佐々木信綱の校註したるを發行せり、

以上歌集と歌學書とをうちまぜて擧げた、

梁塵後抄四卷 編者を忘れたり、古の催樂神樂などの詞曲を注したるあり、

樂章類語抄五卷 高田與清の編

以上遡りて讀むべし、その中には、金玉の歌多ければ、歌學のうへ、發明する所も少からざるべし、

文章學

曆朝詔詞解六卷 著者上にいへり

祝詞考三卷 賀茂眞淵の著 右二書につきて先上古の文章を窺ふへし猶出雲風土記などの中にも古文の傳はれるあり、

眞字伊勢物語二卷

六條宮具平親王の御撰といひ傳ふれども、いかゞにや、されども、この時代に遠からぬ比の撰なるべし、万葉体にかきたるものあれば、和漢の譯法を知るにも便あり、只本書の妙文を味ふのみふあらず、この他、藤井高尙の新釋あどよつきて、みるべし、

勢語通二卷 五井純楨の撰、勢語のよき所を内篇とし、あまき所を外篇として、俗耳に通しやすく解せるあり、一見識ある書あり、

源氏物語評釋七卷

この書は萩原廣道の撰にして、評譯未全からざれども、源語をよむには、これにしく者なし、古文を評せし者、これを始とす、一部通覽せんには、北村季吟の湖月抄をよしとす、

源氏外傳五卷 寫本にて傳はる、熊澤蕃山の作、この書は中々活きたる見やうあり、

紫女七論一卷

安藤爲章の著、源語をよむには、先この書を見るべし、

枕草子春曙抄十二卷 北村季吟の作、枕草子をみるよは、これを尤よしとす、近頃、友人の萩野由之、標註を著はせり、これもよし、

徒然草野槌十三卷

林道春の著、つぎ草をよむよ、これをよしとす、案の外、益を得、

御伽草子二十三卷

中古の草子どもを集めたるあり、近頃この書を板行せり、よき文多し、

舞の本三十六卷 舞の譜本よて、二十六番あり、今全く傳はらざれども、偶一二冊つゝあり、この中にも、名文多かり、將又中古の俗語を知るよも尤便なり、

方丈記諺解一卷

是は、面白く解けり、註者詳ならず、

土佐日記考證二卷 岸本由豆流の作、これをよしとす、この外、香川景樹の土佐日記創見あどもよし、諸州めぐり七卷 貝原篤信の作

和州巡覽記一卷 同上

岐蘇路記一卷 同上

東路の記一卷 同上

源平盛衰記四十八卷

平家物語十二卷

吉野拾遺四卷

太平記四十一卷

義經記

晉我物語

右六種皆雜乘あれども、文章としてみるべし

寶物集七卷 平康頼の作にて、佛法の事を旨としてかきたれども、その比の文をみるによし、

沙石集十卷 無住法師の作、これにも佳文多かり、

三部假名抄七卷 向阿上人の作、これは怪えう力を文に盡きたる者あり、うもく、かくのことくあらでは、万人の聴衆を感動せしむることあたはじとおもはるゝ、凡て、古の名僧たちのものしたるには、名文殊に多し、語格も佛書の方は、いと正し、もて名僧たちの語學に達せしをみるべし、

十訓抄三卷 作者未詳

比賣鑑三十一卷 中村暢齋の作

女四書七卷 辻原元甫の漢土の女四書を譯しゝあり

大和小學六卷 同上

假名本朝孝子傳三卷 藤井懶齋の本朝孝子傳を譯しゝあり

右三書あは、皆漢文をうつしゝ者あれば、本書と并せみて、古人の譯法を悟るべし、

醍醐隨筆二卷 中山三柳の著、その文、殊に普通文の模範たるべき者歟、

駿臺雜話五卷 室直清の著

折たく柴の記三卷 新井白石の著

たはれ草三卷 雨森東の著

春臺獨語二卷 太宰純の著

輜軒小錄一卷 伊藤長胤の著

問はずがたり一卷 中井誠之の著

加茂翁文集四卷

玉がつま九卷 本居宣長の著

草月草紙六卷 松平樂翁侯の著

閑田耕筆四卷 伴蒿蹊の著

同 次筆四卷 同上

閑田文章五卷 同上

近世畸人抄五卷 同上

續近世畸人抄五卷 同上

右は皆先賢の隨筆、又は文集等にして、一讀する人に接する心地す、此等の書、一部ありとも、朝夕枕藉の友として、これに浸染薰習して、さて後輩を把るべし、その文氣を養ふのみならず、その徳を進め、識を長する、鮮少ならざるなり、

扶桑拾葉集三十卷 水戸黃門光國卿の撰、古今の和文三百十三篇を載せられたり、

國文世々の跡三卷 伴蒿蹊の著、歷代文章の沿革をみるに尤よき、

譯文童諭二卷 同上 漢文俗文を雅文にうつす法を論せり、今日の人、必讀の書あり、漸蹊は、寛政の比

に出て、我が國の文章を論しそめき人あり、後來國文の盛に起るに至りしは、この人の力與かり

て多からん、

文苑玉露二卷 編者を忘れたる

遺文集覽二卷 荻原廣道の輯

時文摘紙一卷 村田春海の作

正名緒言二卷 菱實の作

右二書は、稱謂を論じ、漢學者の我が邦の官職事物等を漢名にうつして、あらぬ方にいひあすをうれたみて、著はしゝなり、但し緒言は、漢文にてかけり齋藤拙堂の文話にも、稱謂を論じたる所あり、并せみて、失体をからんやう、注意すること、尤文家の簡要たるべし、

點例一卷 貝原篤信の著

訓點復古二卷 日尾瑜の著

右二書、訓點の法を論せり、これらの書によりて、坊間の誤點本を正さずば、漢文の國文を害する弊は、洗ひざりがたし、必よみて心えおくべし、

漢文

この部には、漢文にかきたる書國史または言語文章に參考すべきものを聊わぐ、

懷風藻一卷 淡海三船の選、皇朝にて、詩集の祖あり、この書を初とて、文華秀麗集、經國集、無題詩

集等あり、參看に供すべし、

本朝文粹十五卷 藤原明衡の作、嵯峨天皇より一條天皇までの文人才子の佳什を集めたり、この頃の文章のてぶりをみるによし、

朝野群載二十三卷 三善爲康の撰にて、多く公文を載せたれば、只當時の文章を見るべきのみならず、古典を考ふるに、たしかある書あり、今に寫本にて傳はる、

本朝一人一首十卷 林春齋の撰、大友皇子の詩を初めて、近世まで名家三百餘人の詩を一首づゝ撰みて、評を附し、系を附えたる、その沿革を通覽するに、いと便なり、詩史ともいふべき者か、

和漢朗詠集 大納言公任の撰、この書は、中古公卿の宴曲に用ひられたる者あれば、通覽しなくては

あり、後の謠曲などに、朗詠、今様と並稱して、往々この書の詩を譯出せり、寛永明暦の頃の本をみるべし、これには、極めて雅馴ある讀法を存せり、

遊仙窟一卷 是の書は、唐の張文成の作あれども、我々國へ渡たりしは、嵯峨天皇の頃ありけん、同天皇群書の中より、これをとり出て、紀傳博士を召えて、その傳を受けんと宣ひえかど、諸博士皆その傳あかりしかば、博士の伊時、いたく歎きけるに、木島の社頭に、一老翁ありて、その傳を知る、伊時就て、その讀法を聽きて、假名を附え、始めて一卷を讀みをへしと、その跋にみゆ、その書に、音訓兩讀の法を用ひざるは、古の漢文讀法をみるに足る、詩經の古本をきたるに、同くこの法を用ひたり、いと婉雅あるものあり、本書は、唐時代の傳奇なり、

用字格四卷 伊藤東涯の著

作文真訣一卷 同上

古文矩一卷 荻生徂徠の著

文變一卷 同上

文戒一卷 同上

文筌小言一卷 服部南郭の著

作文初問一卷 山縣周南の著

文語解五卷 僧大典の著

初學文譚一卷 同上

以上は、皆漢文の要を論述したる者、亦もて國文に參すべし、

初學詩法一卷 貝原益軒の撰

葛原詩話二卷 僧六如の著

同 後編二卷 同上

詩語解二卷 僧大典の著

通俗唐詩解二卷 葛西因是の著

絕句解三卷 物徂徠の著

唐詩要解一卷 岡嶋順忠の著

以上は、皆簡單にして詩作の益ある者、亦もて歌學に參すべし、

類書

この部には、古書を讀むに、必用ふべき字書の類を聊あぐ、

倭名類聚鈔二十卷 源順の作にて、是を備へれかんには、狩谷望之の箋註本を尤よしとす、

新撰字鏡十二卷 今傳はる所は、一卷、僧昌住の作にて、我か邦、字書の始まりあり、

節用集 この書は、林宗二の饅頭屋本を始とて、種々あり、その中をえらひて、時々見れば、大に益

あり、近年までは、節用中の字を用ふれば、俗字ありとて、漢學者に斥けられたまとも、この書に見

ゆる字は、多くは必用上より成りたる文字熟語あれば、今人のあま／＼まき者の作り出たす熟語な

どとは、同日の談にあらず、

倭爾雅八卷 貝原好古の編

東雅二十卷 新井白石の著、この書は、我か邦、古言今言のものとを詳に釋したるあり、有益の書あれど

も、未だ板本にならざれば、誤字なども多し、

同文通考四卷 これも、白石の編

名物六帖三十二卷 伊藤東涯の編

和訓栞十三卷 谷川士清の著、國語字典の濫觴あり、前中後の三編あり、

塵添壺囊抄二十卷 釋某比丘の編

和事始六卷 貝原好古の著

漢事始六卷 同上

和漢名數三卷 同上

拾遺和漢名數一卷

雜字類編二卷 柴野栗山の編

群書一覽六卷 尾崎雅嘉の著

以上

右國學の棗、匆卒の際、古今書目につきて、おのか覺えある書をうきつけし者あれば、順序の前後したる、或は部類の錯雜せる、往々これゆれども、今改むるに暇あらず、讀まん人、これを諒せよ、猶るの佳書よして、洩したるは、他日また示さんをりもあるべし、

クリミヤ戰爭始末 (續)

廣田直三郎

クリミヤ本戰 (つぎ)

インケルマンの戰後、冬寒頓に來り降雨連日開けず、戰場の進退甚だ困難あれば、此れにて五十四年の戰は終りぬ。聯合軍始めより冬越を期せざりければ、其困却一方あらず。さればクリミヤの役は魯軍よりも恐るべきは、疫癘及氣候輜重の不良ありと云へり。暴風は斷ぜず黑海を掠め、運送船の破損甚からず。此運送船には聯合軍が冬越に必要なものを滿載したれば、一風は殆んど一戰と其損害等しと云諸品、爲めに沈没せること夥しく、水夫等の溺死も無數あれば、一風は殆んど一戰と其損害等しと云へり。A storm was nearly as disastrous in this way as a battle. 海岸に於ける軍隊の苦惱も之に劣らず、天幕は裂かれ切られ而て吹飛ばされたり。將校も士卒も等しく荒野に暴露せられ、寒に號び